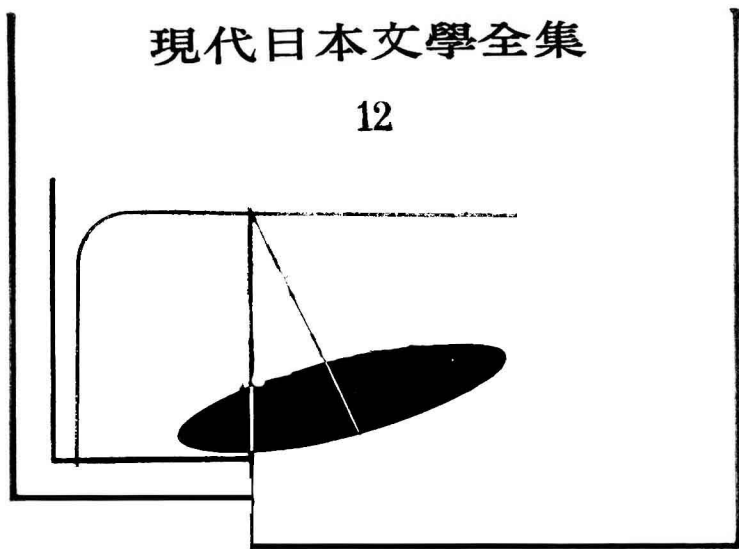


柳田國男 集

現代日本文學全集

12



筑摩書房版



柳田國男集

昭和三十年一月十日 印刷
昭和三十年一月十五日 發行

著者 柳田國男

發行者 古田晁
東京都千代田區神田小川町二ノ八

印刷者 多田基
東京都新宿區改代町二三

發行所 筑摩書房
東京都千代田區神田小川町二ノ八

電話 (29) 七六五一(代表)―四
振替 東京 一六五七六八

製版 株式會社 精興社
印刷 多田印刷株式會社
製本 牧製本所
本文紙 三菱製紙株式會社
クローズ 日本クローズ工業株式會社

柳田國男集 目次

野草雜記……………七

蒲公英……………二

草の名と子供……………一五

〔野草雜記〕

鳥の名と昔話……………一六

鳥勸請の事……………一三

鶯の別れ……………一七

談雀……………一六

〔野鳥雜記〕

信濃柿のこと……………一四

信濃櫻の話……………一七

なんぢやもんぢやの樹……………一五

〔信州隨筆〕

猿の皮……………一六

狐飛脚の話……………一六

サン・セバスチャン……………一六

どら猫觀察記……………一五

〔孤猿隨筆〕

猿地藏……………一八

藁しべ長者と蜂……………一五

うつば舟の王女……………一〇

〔昔話と文學〕

片足脚絆……………一五

味噌買橋……………二二

〔昔話覺書〕

母の手毬歌……………二五

親棄山……………二一九

マハツブの話……………二二五

〔母の手毬歌〕

歌と「うたげ」……………二三〇

山歌のことなど……………二三四

酒田節……………二三八

廣遠野譚……………二四一

〔民謡覺書〕

魚王行乞譚……………二四四

物言ふ魚……………二五〇

餅白鳥に化する話……………二五九

ダイダラ坊の足跡……………二六三

〔一目小僧その他〕

うつぼ舟の話……………二七四

〔妹の力〕

雪國の春……………二八〇

豆手帖から(抄)……………二八八

子供の眼……………二八九

狐のわな……………二九〇

安眠御用心……………二九一

處々の花……………二九二

鶉住居の寺……………二九三

足袋と菓子……………二九三

濱の月夜……………二九四

清光館哀史……………二九五

をかさべり……………二九六

〔雪國の春〕

秋風帖……………二〇九

秋の山のスケッチ……………三三

向小多良……………三四

〔秋風帖〕

南の島の清水……………三六

阿遅摩佐の島……………三三

〔海南小記〕

豆の葉と太陽……………三七

椿は春の木……………四八

武藏野雑談……………三五

川……………三五

〔豆の葉と太陽〕

木綿以前の事……………二六

女と煙草……………二六

酒の飲みやうの變遷……………二五

凡人文藝……………二七〇

遊行女婦のこと……………二七三

〔木綿以前の事〕

不幸なる藝術……………二七九

ウンと子供……………二八三

鳴瀝の文學……………二八九

笑の本願……………三〇六

涕泣史談……………三二三

〔不幸なる藝術〕

高麗島の傳説……………三三

八丈島流人帳……………三七

〔島の人生〕

山の人生……………三三

〔山の人生〕

孫たちへの話……………三九

作之丞と未来……………三九五

喜談日録……………三九七

學生と旅行道……………三九九

二階と青空……………四〇一

柳田さんのこと（井伏鱒二）……………四〇三

解説……………四〇六

年譜……………四一五

府縣名國名對照圖……………卷末

装幀 恩地孝四郎

柳田國男集

野草雜記

この喜多見の原の家に住み始めてから、今度も第十回目の春が復つて来る。此間に於ける草木の有爲轉變は、一つの巨大なる歴史であつて、之に比べると人は寧ろ常磐であつたとも言へる。最初私たちは久しい町の生活に馴れてさゝやかなる庭前の草をも容赦しなかつた。必ず「年々愁處生」といふやうな詩の句を思ひ出して、それを成長させて置くことが、我身をはふらかすわざの様に考へて居た。さうかうして居るうちに道路は小砂利になり、又は雨の後の泥にまみれて、根強いものまでが次第に退いて行つた。家のまはりの植物は萩が先づ衰へて、今では僅かに一叢二叢が、譜第の家の子のやうな顔をして培はれて居る。黄なる山菊は残さうと思つたが、去年などはどうやら咲かずにしまつた。春の草では蕁がたゞ一種だけになつて、蒲公英はもう疾く姿を消して居る。さうしてをかしいことには今生えようとして居る草は、大抵は主人が名を知らぬものばかりである。草の名の教育などは、我々は六つ七つの時から以

後、絶えて與へられもせず又受けようともしなかつた。それ故に幼ない愛着は永く傳はり、新たなる感歎の時あつて催されると共に、測らざるも又人間の無識が、如何に多くの事蹟を閉却して居たかを、心づかしめる機縁ともなるのである。

一
二
杉菜は此あたりの畠を打つ人たちに、何よりも憎まれて居る草であつて、其根は地獄にも届いて居る様に、戯れていふ者さへある位であるが、畠を切り均したばかりの私の家の外庭には、毎年待つて居る子どもがあるのに、もう一本でも生えて来ようとならない。全體どういふ場處に生えるものなのかと、氣をつけて見てあるいて居ると、時々は濕りがちな田の畔にも、日蔭の多い若木林の端にも、驚くほど澤山の小法師の、並んで立つて居ることがある。

さう條件は六つかしくないらしいのだが、不思議に人間の住む所を避けて繁らうとする。庭は全く人の踏む足の敷がどこの土よりも多い。それを彼等の開拓者が嫌ふので、根や養ひだけの問題ではなかつたのである。芒なども性癖が是と稍似て居る。隣の空地ではある季節には是唯一色に蔽はれて、色々の蟲の聲を宿し、小路を隔て一齊に袖を振る様子は、招くと言はうよりも寧ろデモンストレーションに近く、風が吹けば盛んに穂綿を流して来るのだが、私の庭へは僅かな片陰以外、めつたに下りて土着しよ

うとはしない。一時は熱心に闘つて抜き棄てたものを、此頃は一株移植して見ようかと思ふほどになつた。是とは反對に根笹は草に隠れて、地續きの一方の空地には覗いても眼につかぬのに、いつになつても其根が走つて来ることを止めない。選にも出れば芝生の中にも出る。垣根の下はもとより、中には五六間も飛離れて絲のやうな筋を抽きんでようとする。是だけは缺を以て切つてしまはずには居られぬのであるが、考へて見ると竹は人に最も親しむ植物の一つで、鳥であつたらどの位喜ばれたか知れない。

三
それから、タケニグサも此土地へ来てから、始めて氣心よくわかつた野草である。郊外はどこの新建てでも、一度は此草に劫かされて、如何にも文化住宅の淺はかさを、思ひ知らされずにはすまぬ様な時期があるやうに見えるが、少し程過ぎると、是も薄よりはなほ素直に退散してしまふ。今まで日本に此草のあることを知らず、或は土方草などと謂ふヒメムカシヨモギと共に、遠い國からでも渡つて来たものやうに、思つて居る人の多いのも一つの歴史である。タケニグサの生活機會は可なり限られて居るやうである。即ち土を掘り返して日の光が一面に當り、靜かに進み寄る小草のまだ乏しい間に、たとへば植民地の最初の自然移民などの様に、こゝに暫くの盛りを息づくのである。此植物の褐色の汁液には、少しの臭氣があり又毒もある

と言はれる。それよりも人に迫るのはあの熱帯風な大がら、時には見上げるほど伸びてしまふこと、及び是ほど數多くの種子が飛び散つたらどうしよう、思ふ位に實のなることであるが、是は全く魚の子のやうなもので、大部分は無結果に消えてしまふらしいのである。私の家でも三年ほどの間は、タケニ草を目の鱷にした。蹴飛ばす程まで大きくは決してさせなかつた。指の汚れるのを忍んで莖を持つてそつと引くと、するりと附いて来るやうにして必ず中途で根が切れるので、一層憎らしく思はれたのであつたが、めつたには其古根が復活したのを見たことがない。今でも折々は種が飛んで来て、一二寸の芽生えを育てて居るのを見かけることがあるが、それは／＼いたいで、垣根の外に居る従兄弟とは似もつかない。素性を知らなかつたら豆盆栽にでも、したくなるやうな姿をして居る。それでも抜いて棄てるのは傳統と言つてよい。ちよつと蟒蛇の昔語りがあるばかりに、きれいな小蛇が殺されるのとよく似て居て、此方は更に記憶が生々しいのである。私は前かた上州の利根の奥に遊んで居て、偶然に路傍に此草の一群を見たことがある。土工と日の光がたまたま同じ條件を設けた爲に、幸運な一粒が何處からか歸つて来て榮えたので、此時ばかりは流石にあななつかしと、昔の敵を愛する氣になつて居た。流轉はまことに此一族の運命であつたかと思はれる。それが恰も今大都市の周邊に、稍引續いて安住の地を供與せられ、所謂第二の故郷

を念かけて居る點は、寧ろ著しく我々の境涯に似て居たのである。

四

字引を引いて見ると此草の本名チャンバギク、博落廻とあるのが我々を考へさせる。日本に最初からあつて名が無かつたか忘れたか。但しは新種の雜草と同じに、物のまぎれに入込んだのが見つかつたか。わざ／＼名を添へて輸入するだけで、物好きは有りさうに思はれぬのみか、それでは現在の分布を説明することが出来ぬのである。元からあるものは一應は元からあつたと認めるのが自然だ。さうすると此草が久しく注意せられず、もしくは注意する者があつても地方的で、是に全國俱通の名を生ずるに至らなかつたと解して置いて、船載の證據の後日出て来るのを待つより他はあるまい。自然と文學といふ問題は、此方面からも一度は近よつて見る價值がある。奈良や京都の郊外にタケニ草の繁茂する機會が無く、たま／＼繁つて居てもそれを只けうとしと感じて、来て見る文筆の士も無かつた限りは、記録に傳はるやうな本名は生れやうが無い。さうして記録の天然は人も知る如く、甚だしく狹隘であつたのである。花ならば梅櫻あやめに菊、鳥獸なら鶯、時鳥、猪に鹿、まるで近頃の骨牌の繪模様が、日本の自然文學の目録であつたといふも誇張でない。是は風雅の選擇が嚴峻を極めて、些しく俗氣のあるものは吟詠の料としなかつた爲のやうに、千年の長き

に互つて解しつづけて居たのであるが、それはやはり何分にも信じられない。現在の文士などにはもう大分自由なのだが、それでなほ我々の間には、油繪に靜物がもてはやされる程度に、詠物の詩は起らないのである。一つには歌の詞形の短かい爲もあらうが、主たる理由は一言でいへば知らなかつたのである。知らない故に歌になる様な好い名前が生れなかつた。乃ち斥けたと言はうよりも斷念したといふ方が當つて居るのである。

畔田翠山翁の古名録などを見ると、牡丹をフカミグサ・ハツカ草といふ類の五音節語は、何百といふ程も設けられて居る。名が無ければ文學の生れぬのは當り前だから、之を試みようとした者は以前もあつたのだが、それが多くは我儘の、ちつとも適切でないものなので人望が無く、日本の言語として通用しなかつたのだから名譽で無い。國に廣汎なる文藝を起さうとするならば、先づ言葉の問題を一通り解決して置かなければならぬ。歌だから詠物の詩だから事はまだ小さいが、すべてが此調子であつては我々の筆舌は束縛せられ、少し込入つた氣持は上品には人に示すことが出来ない。いくら本名でもチャンバギクでは歌にならぬといふことが、偶然ながらも我々に大きな暗示を與へて居る。それで此線路を辿つて、もう少し前の方へ話を進めて見ようと思ふ。

五

日本に佳い單語を増加して行かうといふ努力には、動植物學者もたしかに參與して居るが、幸か不幸か彼等は散文家である爲に、少しでも歌よみの苦勞を察してくれない。どこの國でも學名は本名でないのだが、我邦では精細を旨とするの餘り、二階三階を積重ね穴藏をほり下げて、時には三十一文字と背競べをしようといふ長い名が作られて居る。殆ど言語の終極の用途を、念頭に置かぬ所の所行である。此狀態で新七草でも投票すれば、選舉肅正などはとても望まれぬことで、誰しも上品な句や歌になりさうな名を持つ草へ、入れたくなるのは免かれぬ弱點であらう。乃ちいつ迄もあれは名が俗だなどと、負惜みを謂つてあきらめるものが多いわけである。之に比べると郷土の人たちの附けた名は大抵はもつと實際的であつた。歌にもうたはれず文句の口拍子にも乗らぬやうな草の名は、生れたかも知らぬが承認せられては居ない。といふよりも寧ろ歌や文句の中から、孕まれたらうと思ふものが多いのである。是は統計の上にも多分現れることと思ふが、今まで最も普通であつたのは三音節、クサの語を下に添へて五字の一句を爲すもの、次には一つのテニヲハの餘地を存して、四音六音でこしらへたものが多い。花とか鳥とかを附けて呼ぶ物の名も是と同様で、かねて法則を意識して居たのでは無いまでも、所謂語路の悪い言葉は、忌んで採用しなかつたらしいのである。是が深見草一流の歌道のかぶれでなかつたことは、和歌には向かぬが民間の

うたひものや童言葉に、びたりと合つて居るもの多いのを見ればわかる。潜む動機がもしも有りとなれば、遠く溯つて文と唱へとの、未だ分れなかつた世に求めなければならぬのである。

六

そこで立戻つて再びタケニグサを説くことになるが、私は此名のいつ頃からあるのかを考へる前に、先づ以て或一つの野草に、どうして名を與へる必要が起つたかを尋ねて見たい。最もよくある機會は效用の發見、藥や染料の爲に野山を分けて、是一つを搜さなければならぬ時であらうが、今日普通にいふ竹を煮ると柔くなるといふ説は、何分にもまだ信用が置けない。果して一人でもそんな實驗をして見た人が有るかどうか。確かめもせず語の解釋に供するのは悪いと思ふ。或は其點は事實に反するまでも、古人が誤り信じてさう名づけたのだらう。タケニといふからにはさう釋くより他は無いと思つて居る人があるかも知れぬが、それはもう少し多くの事實を知つてからで無いと、我々には到底斷言の出來ぬことである。さう／＼自分たちの先祖をまちがへばかりした様に、證據も縁に無いのにきめてかゝることは、感心せぬ態度だと私は思ふ。

は三重と奈良縣の界の山村でゴウロギ、ゴロはあの地方でも大きな石のごろ／＼として居る處のことだから、其ゴロによく生える木といふ意味に解してよからう。東京京都の人だけは知つて居らぬらしいが、ゴロもゴウラも全國に互つて、かゝる礫不毛の地をさう呼んで居る。起りは多分岩くら、くらし／＼などのクワであらう。日本人は斯ういふ語の用途を分化させて行く場合に、いつかいいやなものをだけを濁音にする癖があるやうだ。現にこの土地でも土と交つた小石の堆積して居る處はガラ、大きな石の在る處だけゴロと謂ふとのことで、この二つの語は別とも考へて居らぬ様だから、つまりは少しでも似つかはしい音に偏るのである。信州の上伊那から來て居た青年は、國ではタケニ草をガラガラと謂ふと語つた。其時には此植物がうら枯れて後に、秋の風に吹かれる様子を形容したものかと思つたが、或はその氣持は加はつて居るにしても、やはり發端は亦ガラに生える草といふに在つた。それが大きくなつて木のやうに見えるからゴウロ木で、此程度の一致ならば、別に一方から傳へなくとも、偶然にも起り得たのである。

七

越後の西頸城地方で、この草をツンボグサと謂ふわけはまだはつきりしない。土地の人ならばまだ其命名の氣持を覺えて居るかも知らぬが、福井附近などで芒の穂をミミツンボと謂ふのと、

或は關係の有る言葉かと考へられる。是とても竹を煮て軟かくするといふ噂と同様に、曾てその經驗をした者はあらうと思へぬが、何だか氣になつて近よつて行けない故に、輕々しくさういふ名前が承認せられることになつたのであらう。下總印旛郡の草原地には、或は又ドロボノシンヌギとあまりに奇抜だが、以前の笑ひの材料には尻といふ語が多かつた。例へば細蘭をサギノシリサシ、近頃入つて來たと思ふ龍舌蘭をヌスピトノシリサシと謂ひ、こまかな針のある「とげそば」といふ湿地の草の一名を、ママコノシリヌグヒと呼んで居る人もある。以前は尻拭ひには木や草の葉を用ゐたので、泥棒ならば之を用ゐるだらう、もしくは是で澤山だといふ意味からでも、半ば戯れに斯ういふ名を案出せられ得たのである。立會つて竹を煮させて結果を見た人だけが、タケニグサの命名に參與したと、見なくてもよい一つの理由である。

それからもう一つは私などの郷里、播磨の一部にはオホカメダホシといふ方言がある。狼が此草を食ふと酔つて倒れるから、斯ういふ名が生れたやうに説明する者もあるが、此經驗などは慙々として試み難いものである。狼が草を食ふといふことが既に考へられず、それを見て居て酔つばらふのを確かめた人などは、捜しまはるだけのものは無いのである。たゞ自分等が是によつて感ずることは、もしもタケニ草の故郷が外國であり、又は早くから現在の地であつたらば、斯ういふ名は恐らく發生しなかつたらうといふことである。伊勢信濃のガラ・ゴウロギも同じことだが、この異様な植物はもと狼でも棲息しさうな地に在つて、豫め今日の郊外居住に備へて居たのである。たゞ人間が彼等の存在に注意し始めた機會が區々であつて、斯うして私のやうに昭和の昭代に入つて漸くこの一つの生活に美しい意義を見出した者さへあるのである。詩の發展は乃ち無限であらうが、それは今少しく未知の自然の方に、眼を向けかへなければならぬ様に考へられる。言葉が制限であり、習慣が附け紐である限りは、要するにそれはただ蕪村のいはゆる、「水桶にうなつき合ふや瓜茄子」である。

そんな憎まれ口をきくのが私の目的ではなかつた。チャンパ菊の異名に今一つ、辭書にも認められたササヤキグサといふのがある。物にも似合はぬ佳い名である。此言葉については色々空想が起る。たとへばあの鈴なりになつた枝の種子が、風に吹かれて幽かに鳴るのかとも思はれ、實は私も其音を聴いたやうな氣さへする。しかし是は明かに空想であつた。種は柔かな綿のやうなものに包まれて靜かにこぼれて居る。さうして梧桐のやうなあの大きな葉は、がらがらならともかくも、さゝやく音は立てようとも思はれぬのである。比較はどこまでもして見なければならぬ。東京の近くでは相州の津久井の山村などが、どこでもタケニ草をササヤキと謂つてゐる。即ち遠くから見てこの草の連なつた穂先が、笹に似てやゝ焼けた様な色を帯びて居ることが、此名の與へられた元の動機であつたらしいのである。之をササヤキ草と横なまる位のこととは、少しく風流心のある者ならば誰にでも出来る。まして適切でもない色々文藝用異名に、久しく馴らされて居る人ならば喜ぶかも知れない。たゞ私たちはまだ何處にさういふ語の行はれて居るかを知らぬだけである。是がもし東京の現象であるならば、やがては又普及し且つ新たな解説が副ふことであらう。大よそ一通りこの事情が判つて居ての上ならば、それを觀察して居るのも決して興味の無いことではない。

近年私の家の庭から追拂はれたタケニ草は、僅かな道路を隔てた西隣の空地に往つて今は住んで居る。爰も芒が一年増しに根を張つて來て、それと昔から仲のよい萩や「われもかう」の、咲きまじつた野原に復らうとして居るが、まだ其片端には普請で土を動かした部分があつて、そこばかりは堂々たるタケニグサの林である。タケニといふ言葉も或は是から出て居るのかも知れぬ。梢が伸びきつて悉く茶色の細長い花莖を附けたところは、山の野生の小竹原を思はせる。竹にもやゝ是に似た色彩を見せる季節がある様な氣がするがまだ確かなことは言へない。兎に角に此様なよく嫌はれる草にも、美しく見える日が二日か三日はあつて、それが最も竹ら

しく感じられる時でもあつた。ちようど初秋のしつとりと露の置く晩方などに、立止まつて見て居たいやうな氣持になつたことも折々ある。それよりも忘れ難いのは夜の引明けに、二階の寢室の窓を開いて、あく美しいと思つて見たことが何度かある。それが雨でも降るか荒い風でも吹くと、すぐにもう狼藉になつてしまふのである。郊外の朝と夕方は存外に多事なもので、私は氣樂だから斯んなものにも目を留めて居るが、省みられぬ場合の方が多しと思ふ。さうして去年まで確かにさうだつたが、此夏はもうどうなつて居るかわからない。

九

たつた十年ばかりの、しかも飛びくの觀察などは、今の植物學に逢つてはかなはぬにきまつて居る。しかし私は前に述べた事實に據つて、今は大よそ是だけの歴史を推測して居るのである。このタケニ草の最初の郷里は、寧ろ人げの少ない山中であつた。山が崩れたり水で荒れたりすると、何よりも早く飛んで来て、そこに芽を吹くのは此草の種子であつた。日本は地變稀でない國だから、順にさういふ處をまはつても血統は絶えなかつたらしいのである。それが近年は土地利用の型が變つて、人里近くにも遊ばせてある場處が出来、それも底土を切つたり覆したりする故に、追々と彼等の進出が始まり、少くとも都會の周圍では、所謂異國情調を發散するやうになつたのだが、元々御互ひによく似

た身の上である以上は、是はたゞ我々の忘却、もしくは最初からの無關心以外の、何物をも意味しないのである。我々の先祖も山に據り、山あひの小さな空地のみを捜し求めて、未々其後裔が斯んな海端の平蕪の地に、集合し又放浪しようとも思はなかつたことは同じだが、人間の長所は次々の境涯に應じて組織を擴大し生活ぶりを變へ、新たな名稱を認め新たな美德をたゞへるに急であつた餘り、古い縁故のある若干の天然を疎外し、又時としては敵視しなければならなかつたのである。しかしタケニ草の世も亦開けた。人と交渉する言葉は多くなり、それが又追々と耳に快いものとならうとして居る。この落莫たる生活があはれを認められ、終に人間の詩の中に入つて來るのも、さう遠い未來ではないやうに思はれる。

(昭和十一年三月、短歌研究)

蒲公英

に耀いて、黒い土の上に咲いて居るのを見て、眼を怡ばしめなかつた人は無かつたらう。さうすれば必ず名があつた筈である。歌を詠まなかつた萬葉時代の人々は、果して此草を何と呼んで居たらうか。以前佳い名があつて不幸にして忘れられたか。但しは又歌に向かないタンポポが古語であつた爲に、斯うしていつ迄も子供にしか省みられないのであらうか。我々の物の名は誰が作り、誰が是から先は管理して行くのであらうか。斯ういふ答の無い色々の間が、今ではまだ野に充ちて居るやうに思ふ。

學者が都市に住んで標準語といふものを守り立てる迄は、タンポポといふ草の名の行はれて居た區域は案外に狭いものであつた。それが今日のやうに流行したものは、或は京都の子供の力であつたかも知れない。地方には今でもまだ幾つかの、大人が附けたかと思ふ名稱が、何となく押込められて残つて居る。それが懸け離れた遠くの土地に於て一致して居るのは、偶然とは言ひ難いやうに思ふ。さういふ中から或は今一度、昔使つて居た尋常の日本語を、見出すやうなことが無いとは言はれぬのである。

たとはば千葉縣では、上總の各郡に互つて、蒲公英をニガナと謂ふ方言が行はれて居る。以前春の野の草を野菜として摘んで居た頃には、確かに苦いといふことが此植物の特徴であつたらう。鹿兒島縣でも奄美大島の北の村々はやはり此草をニギヤナと謂ひ、にがいから苦菜だと説明せられて居る。

それから今一つ、分布の更に広い方言がある。岐阜縣では山に屬する北半分、信州でも主として北信の諸郡に於て、クジナと謂つて居るのがそれである。俳諧寺一茶の方言雜集の中にも、ちようどあの人を詠じたやうな、一章の白唄を書き留めて居る。

男やもめとクジナの花は
盛り過ぎれば御坊となる

この御坊は即ち坊主で、何人もすませざる淋しい人のことであるが、この草の花が綿になつて飛んだあと、恰かもがつさうの様な頭になる點が似て居たのである。

クジナといふ名詞も又飛び散つて奥羽の處々に行はれて居る。例へば宮城山形の二縣の南半分でクジナ又はグジナ、九戸の葛巻附近ではクジケアとも謂つて居る。羽前も米澤あたりはタンポポに近い花の名が別にあつて、嫩い葉を食料にする場合ばかり、クジナといふ語を用ゐるのである。越後でもグズナは野菜としての蒲公英の名であつた。多分は北信などの白根と同様に、元はタンポポもクジナの花で通つて居たのであらう。

佐渡にもクチクチナといふ村がある。土地によつては稀にはクデナといふ處もあるらしいが、其方は轉訛である。倭名鈔には蒲公英和名フジナ、又タナとも謂ふとあつて、タナの方は今は痕跡も無いが、カ行とハ行とは、日本ではもと紛れ易い音であつた。即ち少なくとも曾て或時代に、京都の上流の間にもクジナに近い語は認

められて居たのである。但し何故に此草をフジ菜と謂つたかは、今はまだニガ菜のやうに明かになつて居ない。和訓菜には藤菜の意味であらうとあるが、少しも根據は無いのだから解説でも何でも無い。それよりも今一足遠くへ尋ねて行つて、更に是以外にどんな名前があるかを、知つて置く方が私たちに於ては樂しみである。しかし斯うした氣の永い穿鑿には果して世間の賛同が得られようかどうか。いつも一人で野中の路をあるいて居る者には、一向に見當が付かぬのである。

二

タンポポの代りに行はれて居る方言は、まだ幾つでも意外なものがある。信州でも山を越えて諏訪の湖岸に下ると、そこにはクジナもあるがそれよりもガンボウジの方がよく知られてゐる。甲州でも國なかの平野はガンボウジ、伊那も上下二郡がすべて其通りで、飯田の城下には又ガンポといふ語もある。クジナが行はれて居る善光寺平などにも、やはりガンボジといふ名が知られて居るのを見ると、是は花の方をさして居たものらしい。私の今の想像では、ガンボウジは子供などの頭の「おかつ」のことであつて、あの愛らしい花の姿を、形容した語では無かつたらうかと思ふ。是とよく似た例は白頭翁、歌にオキナグサといふ花の名の、土地さまざまの變化であるが、それは他日又別に御話をして見たい。兎に角に是とクジナとの間には、

最初から語原の關係は無かつたやうである。其次には越後の彌彦山の麓の村などに、ゴゴジョウと謂ふのが又タンポポのことである。是は諏訪あたりのガンボウジと、或は系統を同じうして居るかと思ふが、それもまだ變化の路筋を考へられぬ。同じ例は遙かに飛び離れて、南秋田の八郎潟の岸の村々に、ゴゴロッコ又はゴゴといふ語があるのは妙であるが、現在はまだ此二處以外に蒲公英をゴゴ、もしくは之に近い音で呼んで居る地方は知らない。

同じ秋田縣でも北秋田郡の一部はクマポ、山本郡ではクマクマといふ土地がある。青森縣も二つの市を始め、津輕は全體にクマクマといふ村が多く、たゞ北端の小泊などに於て、之をカコモコ又はクワコモコと謂つて居るのである。或はアイヌ語からでも出たのでは無いかと思つて念の爲にバチエラー氏の辭典を引いて見たが違つて居る。福井縣の南條郡にはカッポコと云ふ例があるが、是は寧ろ後にいふタンポポの變化であつて、カコモコとは縁が無いやうである。何にもせよ今は名の起つた理由までが、丸で不明になつて居るのだから、歴史を問ふことが殊にむづかしい。ところが他の一方にはなほ色々の方言で、どうして出来たかを想像し得られるものが残つて居る。誠にたわいも無いことではあるが、それをはつきりと知つて置くと、後に類推によつて思ひの外の解説が成立つかも知れぬ望みがある。先づ一番わかり易いものから言ふならば、信州北佐久郡の一部で蒲公英をチ

チグサ、是は疑も無く乳草であつて、あの花莖を折つて白い汁の滴るのを、母の乳房に思ひ寄せたのである。作者の髣髴で無かつたことだけは断定しても差支はあるまい。加賀の金澤で此花をヤケドハナと謂ふと、私に教へてくれた人があるが、もし或はヤイトバナの記憶がひでは無いか。もう一度別の人に聞いて確かめたいと思つて居る。自分などの幼い頃には、タンポポの莖を折つて折れ口を肌を押すと、小さな圓い乳の輪が出来る。其上を麥の黒穂で叩いて、ちようど御灸の跡のやうになるのを、ヤイトをすゑると謂つて遊んで居た。併し其爲にヤイト草といふ新名を、此草に付與した實例はまだ聞いて居ないが、チグサといふ方は信州と百數十里を隔てた、廣島縣の倉橋島にも同じ例があるのである。

13 蒲公英

それから今一つ兒童の命名になるかと思ふのは、相州愛甲郡煤ヶ谷の山村などで、蒲公英をピーピーバナ、東上總の海岸でピンピバナといふもので、是はあの莖を切つて草笛を作つて吹いた者の、記念であつたことは言ふ迄も無い。西の方では攝州の有馬郡などで、シービビと謂つたのも同じ趣旨である。私の在所はそれから十四五里も離れた處であるが、シービビといふのは青麥の莖を折つて、吹きならす笛であつた。子供によつては麥の黒穂のことを、シービビと謂ふのだと思つて居る者もあつた。さうして自分も亦口でシービビと謂つて吹く爲か、私たちが耳には明瞭にそれがシービビと聞えたのであ

る。

三

紙やセルロイドの色々の玩具で育てられた人は殆ど想像も出来ぬ話であるが、以前の子供は春の立ち歸るを待ち兼ねて、斯うして銘々の遊戯材料を求めたのであつた。人が天然と仲がよくなるのも、本當にそれだけの理由があつたのである。しかも其玩具が時々流行を追つたことは、昔もやはり今と同じであつた。其中でも起原が古く、何度も時を隔てて戻つて來たかと思ふのは、タンポポの莖を折つて兩方を少し割り、それを水の中に入れて、其外皮の圓く反りかへるのを見て居る遊びであつた。子供でなければ其様な氣の永い見物は出来ないと思ふ。是も上總の幾つかの郡に於て、今でもニガ菜の花をマンガモンゴと謂つて居る。それが如何なる理由から、さう呼ぶかを知らぬ人も多くなつたが、百年ほど前に著された深川元備の三州漫録に其説明がしてある。市原郡の立野といふ村で實見したと言つて居る。小兒は蒲公英の莖を割いて置いて、「まんごまんごまがれ」といふ文句を唱へる。さうすると草は恰かも其號令に従ふかの如く、徐々として曲つて來るのであつた。是から遠く離れた愛知縣の寶飯郡額田郡、又幡豆郡の一部に於いても、タンポポをマンガンと呼んで居る土地が今でもある。更に西の方に行つて大分縣玖珠郡の山村にも、この草をマンガンと稱する處がある。時を同じうして此遊戯が流

行したので無いまでも、兎に角にいつの頃にか九州にも「曲れ」といふ唱へごととは用ゐられて居たのである。

沖繩の諸島を見渡すと、タンポポの方言の今存するものは案外に乏しい。八重山と宮古との中間に在る多良間といふ寂しい孤島では、此草をトゥルクナーと謂ふさうであるが、その意味は倭名鈔のフジナと共に、もう私たちには判らなくなつた。それから琉球の本島まで戻つて、一ばんよく知られて居るのはワイオーバー、ワイオーバーは即ち家猪のことで、本來は此獸の鳴き聲から出た名である。だからワイオーバーは「家の青葉」だと思つて居る人も多いらしいが、果して蒲公英を家に食はせるかどうかは確かでない。那覇の周圍其他の或村々では、是をマールフアーと謂ふ者もあり、それを眞大葉の意味だと説明してくれた學者もあるが、この二つの語はもと一つらしいから、却つて雙方の解釋の共に誤つて居ることも危まれる。それから今一つ、是もやはり那覇附近にナガリールといふ方言があつて、是は兒童の用語かと思はれる。沖繩音ではmが殆ど常にnに變化し、例へばイマ(今)をナーといひ、ミヤグスタ(宮城)をナグスタと發音して居る。だから恐らくは又此ナガリールも、「曲る」といふ語の命令形であつて、近世此島でもタンポポの莖を曲らせて、嬉笑する童戯が行はれて居た痕跡であらう。上總はどういふものか、妙に此植物の異名が多かつた。茂原の近くでは或はオヤコウコウバ

ナともいふと、是も深川氏の漫録に見えて居る。私の想像ではもとは有名な昔話などがあつて、それで此様な名が行はれることになつたかと思ふが、兎に角親孝行といふ理由は、此花がよく御使ひするからであつた。信州の子供たちは、タンポポの花の白く綿になつたものを手に取つて、「お坊お坊館買ひに行け」と言ひつゝ、ふつと吹飛ばせて楽しむといふことが、小山眞夫氏の小縣民謡集には見えて居る。私の生れた瀬戸内海の濱近い村にも、是と同様の遊びはあつたが、唱へごとには全くちがつて居た。今でも思ひ出すのは春の青空にあの花をかざして、幼ない子たちが皆一様に、「あーぶら買ひに酔う買ひに」と言つて、あの花の穂をふつと吹いた。蒲公英の種子は細長く下ぶくれで、少しばかり徳利の形に似て居た。あれが空中に飛び散つて行く様子を見て、我々は子供が徳利を手に下げて、酔や油を買ひに行く姿を思つたのである。さうして此遊びも又弘く行はれて居たと見えて、對馬の島の淺藻といふ村でも、やはりタンポポを「酒買ひ坊」と謂つてゐる。

四

多くの野の草が稚子を名付親にして居たことを知つて、始めてタンポポといふ言葉の起りが察せられる。タンポポはもと鼓を意味する小兒語であつた。命名の動機はまさしくあの音の寫生に在つた。それが第二段に形の鼓と近い草の花に轉用せられることになつたかと思はれる。

小野蘭山の本草綱目啓蒙に、蒲公英を越中國でツツミグサと謂ふとあり、しかも此地方でタンポポといふのは、花生けその他の竹の筒のことであるのを見ると、やはりあの鼓の音も元はタンポポと聽いたのであつた。中世盛んに流行した歌問答の昔話にも、西行とか宗祇とかいふ旅の歌人が、攝津の鼓の瀧に來て一首の歌を詠んだ話がある。

津の國の鼓の瀧を來て見れば川べに咲けりたんぼの花

さうすると傍に草刈りの童子が居て、第三の句を「うち見れば」と改めてくれた。宗匠自慢の鼻は忽ち折れ、其童子の何とか明神の化現なることを知つたといふ類の物語、是を詳しく説明することは退屈だが、兎に角此話の出來た頃までは、人がタンポポの本は鼓の名であることを知つて居た。後年この樂器の流行がすたれて、小兒は名の起りをもう忘れてしまつたのである。

タンポポとよく似た名の付け方は、なほ他の色々の樂器にもあつた。例へば越中から越後の平野にかけて、御寺の本堂の大きな鏡をガンモモ、家々の佛壇の小さな鉦を、チンモモといふのは普通の語である。ガンとかチンとか謂つたばかりでは、幼ない人たちには之をあの音の形容と認められなかつた。餘韻の暫らくの間モモと續く所までを、是非とも其名稱の中に取入れなければ、彼等には氣がすまなかつたのである。ところが愈々本堂の大鉦をガンモモと呼ぶことになつて、又暫らく經つと今度は形の似たも

の之を轉用する。越後の奥から信州北部にかけて、櫛の實のうてな我々がドンダリのオワンと謂ひ、又は戯れて花嫁のがうしなどと呼ぶものを、子供は皆ガンモモと謂つて居る。寺の鏡鉦とは大小の非常な差があるが、形だけでは成程よく似て居る。蒲公英のタンポポになつて來た順序も、全く是と同じであつたと思ふ。

あまり長くなる故も今回で此話はおしまひにする。小兒はタンポポの最初の發明者ではあるが、決して我等の如くいつまでも自分の手柄を記憶して居ない。鼓といふのが三河の萬歳以外に、使ふ者が無いやうになれば、後はたゞタンポポの音の快さと、其花の鮮かな色とを樂むばかりで、言はば其次にもつと面白い名前の現れて來るのを待つて居るのである。さうして成人のやうにいつまでも、無意味なる符號を守つて居ることは出來なかつた。だから少しづつ新意匠を加へて此音を變化させようとして居るのである。

タンポポは私などの國ではタンポであつた。近畿の府縣では或はタンポコといひ、又はタンボンと謂つた。東海道でも駿河ではタータンポ、又はタータンバ、伊豆の入口の方はタンタンポ、奥伊豆に行くときタタンポ、相州の三浦ではチヤンポ、甲州の東八代はチヤンポポ、上州妙義山の周圍はチヤンポコ、それが日本海上に飛んで佐渡の外海府もチヤンボン、同じく河原田ではチヤンチヤンボンとさへ謂つて居る。私たちの今住む三多摩地方には、タッポ又は